



TITLE:

古典學派の貿易理論について

AUTHOR(S):

松井, 清

CITATION:

松井, 清. 古典學派の貿易理論について. 經濟論叢 1936, 43(1): 105-124

ISSUE DATE:

1936-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130824>

RIGHT:

京都市大學經濟學會 經濟叢論

第 一 號 第 四 十 三 卷

昭和十一年七月一日發行

論 叢

地方税に適當なる税種……………法學博士 神戸正雄
現下の土地問題と自作農創設事業……………經濟學博士 八木芳之助
フィシヤア利子説の難點……………文學博士 高田保馬

時 論

日濠貿易の危機……………經濟學博士 谷口吉彦

研 究

世界大戦前の日本朝鮮及滿洲の金爲替本位制……………經濟學士 松岡孝兒
古典學派の貿易理論について……………經濟學士 松井 清
チヌーネンの人口論……………經濟學士 菊田太郎

說 苑

市町村に於ける國政事務費……………經濟學博士 沙見三郎

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

古典學派の貿易理論について

松 井 清

一、問題の提起と理論の對象

比較生産費説の名と結び附けられる古典學派の貿易理論とは、此處に指摘するまでもなく、トレンズが最初に提唱し、リカードに至つて完全に體系化された理論である。ミル・ケアンズ・シデウイツク等によつて順次補充され訂正されて、十九世紀の英國に華々しく展開した自由貿易運動の基礎理論となつたこの理論は、爾來今日に至るまで自由主義的貿易理論家によつて相變らず承け繼がれてゐるのである。また多くは保護貿易の立場に立つて貿易を論ずる大陸の學者に於てすらその據りどころは、古典理論の多かれ少かれの修正か或ひは批判であつたと云へよう。然るに最近に至り理論經濟學の分野に於ける一般均衡理論の壓倒的勝利は、古典學派の貿易理論はその基礎に横はる勞働價值説が成立し能はざるが故に成立し能はずとする議論を生むに至つた。例へばエンデエルとかオーリン等の學者の言ふところである。これ等の著者の議論は、しかし乍ら、そのまゝには受け入れられない。假令ひ彼等の説くが如く、勞働價值説はそのよつて立つ前提の抽象性の故に妥當する範圍も自ら限定さるべきであると云ふことを認めるとしても、その結果は

1) トレンズの著書の直接に意圖したところは、當時英國に勃興した重農主義的經濟學者の反駁であるが、その内に圖らすも比較生産費の教義が述べられたのである。
R. Torrens, *Economists refuted* (1808)

必ずしも古典學派の貿易理論を否定することにはならない。如何なる立場に於ても、勞働費用が費用項目の内で重要な地位を占むることを認める限り、更らに他の費用項目も窮極に於て勞働に還元され得ることを許す限り、吾々は勞働價值說から學ぶべき何者かを持つてあらう。現に近代理論に於ても、英國學派の好んで用ひる實質費用分析は古典學派から多くの傳統を承け繼いでゐる。かく考ふるとき古典學派の貿易理論は成立が可能となるのみならず、更らに次のことを併せ考慮に入れるときは必要とすら成つて來るのである。一體國際貿易理論は國際交換從つて國際分業が何故に行はれるかの理論と、その際に於ける價格決定の理論を主要内容とし、前者は貿易の行はれる窮極の原因を説明し、後者は貿易の直接の動きを説明する使命を持つてゐる。ところが吾々がもし費用分析を否定するときは必然に前者の理論を拋棄することとなり、そのために貿易現象のよつて來る原因の半ばを見失はざるを得ないのである。何故ならば二理論が相補充し合つたとき初めて貿易現象は具體的に説明されたと云ひ得るからである。かゝることのなきために古典學派を反省することが必要となつて來るのである。

私は以下に於て一定の前提の下に古典派貿易理論の成立し得るを認めつゝその範圍内に於て問題としうる點を問題とし、これが相對價格の理論と矛盾するものでないことを明らかにしたい。蓋しそのことによつて貿易理論の内容をなす二テーマが理論的に統一され得るからである。尤もかゝる企圖は既にハーバラー²⁾によつて試みられたところであるが、彼れが主としてタウシツグに

2) G. Haberler, Der internationale Handel (1933) S.S. 94-95.

依りつゝ問題を展開してゐるに對し、私は本論に於てバローネ・コルムの行き方を學ばんとする意圖を持つてゐる。

(註) 古典學派の持つ素朴性は、その立場に於て展開されうる問題を著しく限定することは云ふまでもない。費用は生産物數量に關係なく一定と見られてゐる。従つて最近グラハムやハロッドの取扱つてゐる費用減費用遞増の法則と貿易の關係と云ふ問題の如きは古典理論では取扱ひ得ない。また價格形成に於ける需要の作用が著しく輕視されてゐる。需要が生産物價格形成に如何なる役割を占むるかに關しては若干の展開が行はれてゐるが、これとても近代理論に比すべくもない。更らに種々なる需要彈力性の差違に基く複雑なる價格形成の問題の如きについては全々觸れられてゐない。

右の様な意圖に於て問題を進めて行くのであるが、理論の内容に入る前に理論の取扱ふ對象について一言しておかねばならない。換言すれば、貿易と云ふ名に於て、古典學派が何を理解したか、更らに進んでは何を理解すべきであつたかについてである。貿易の概念規定とも云ふべきこの問題に關して特に注意すべきことは、貿易理論の理論的對象とかゝる理論的對象を生み出すに至つた歴史的社會的事實との間に一應明確な區別を設けねばならないと云ふことである。それは次の事實を見れば直ちに明らかと成らう。リカードは漸く産業資本主義が完成した十九世紀の初頭から中葉に至る英國の現實からその理論を生み出したのであるが、リカードを圍繞したであらう現實が可なりに變化した今日でも、その理論的對象が何らかの形で存し得たならば、理論は充分に妥當し得るのである。二者は窮極に於ては一致するものであるに拘らず、一應區別さるべきであるし、また區別することが出来る。今は古典學派の貿易概念を觀察しつゝ、それから歴史的

事實を除き去ると云ふ方向に於て貿易の概念を規定して行きたい。

リカードは先づ國際間に於ける資本と勞働の移動困難と云ふことによつて貿易を特色づけんとした。産業資本主義は國民的生産を規模として發生し完成する。従つて産業資本主義の持つ完全な自由競争は國內に於てのみ認められる。國內では資本と勞働は常に移動自由である結果、生産條件の不均等はたとひ一時的には存在し得るとしても、長期間に互つては決して存在し得ない。

窮極に於ては常に價值法則が妥當し、平均利潤率が支配する。然るに國際間では生産條件は長期間に互つて不均等たるを常とし、價值法則は妥當せず平均利潤率は支配しない。³⁾何故なら産業資本主義は資本・勞働の如き生産要素を國民的に拘束するからである。かくてリカードに於ては貿易は國際貿易であり、國內商業と相對立するものである。次にJ・S・ミルはリカードに於て貿易に附着せる政治地理學的要素を除き去つて、遠隔地間の商業と近接地間の商業の區別を行つた。⁴⁾

ミルによると資本・勞働の如き生産要素の移動が困難な地域間の商業を貿易とするなら、之は必ずしも國際間にのみ限らない。かゝる事實は一般遠隔地間の商業に見らるゝところであるとなしてゐるから、この見地からすれば貿易は遠隔地間の商業を意味することとなるのである。更らにケアンズに至るとリカード・ミルに對立して、貿易は資本・勞働の移動不自由なる事實から解放されて規定されてゐる。彼によると資本の如きは國際間に於ても遠隔地間に於ても移動が自由であつて、資本の移動の困難なぞと云ふことは決して貿易の特質を明らかにし得ない。ケアンズ

3) Ricardo, Principles (岩波版) p. 118.

4) J. S. Mill, Principles (Ashley's ed.) p. 575.

はかくて無競争集團の概念を貿易理論に應用するのである。⁵⁾ 卽ち自由競争の行はれる産業集團間の商業は結局生産費に従つて取引されるとなし、之に對して貿易は無競争産業集團間の取引であつて、かゝる取引は相互需要によつて支配されたとしたのである。この外にシデウィツクの如く運賃の大小を以て貿易と他の商業との區別たらしめんとした異説も存在したが、⁶⁾ 大體古典學派の貿易概念はリカード・ミル・ケアンズによつて確立されて行つたそれを指すと見て差支へなく、その後之に對して種々の立場から幾多の批判が加へられた。⁷⁾ がその詳細には今は觸れないこととして、私は貿易は生産條件を異にする綜合經濟間の取引を意味するものとして議論を進めて行きたい。⁸⁾ 古典學派の貿易概念に對する批判の内重要なものゝ一つとして、今日に於ては勞資の移動が自由になつたと云ふ經驗的事實をあげる説があるが、この批判は生産條件の不均等なる綜合經濟間の取引と云ふ右の規定によつて完全に避ける。生産要素ことに資本は金融資本主義の下にある現在ではその移動は比較的容易に成つてゐるが、しかもなほ獨占その他の社會的自然的原因のため、生産條件の長期的不均等は依然として存在してゐる。従つて上述の如き前提の下に於ては依然として古典學派貿易理論の妥當する餘地は存してゐるのである。

かくの如く貿易を生産條件を異にする綜合經濟間の取引と解する時は、貿易は必らずしも國際間にのみ限らず、國內にも地域貿易とも云ひうべき貿易が存することとなる。しかし乍ら生産條件の不均等は國際間に於て特に著しく、且つまた之とは反對に國內では、今日生産條件の均等化

- 5) J. E. Cairnes, Some leading articles of political economy (1874) p. 323.
- 6) H. Sidgwick, The principles of political economy (1901) p. 212.
- 7) この批判の種々の形態は バステューブル、ハーバラーが要領よくまとめてゐる。Bastable, The theory of international trade (1903) p. 6. 以下 Haberler, a. a. O. S. 97.
- 8) 高田保馬博士、經濟學新講第二卷 203—204頁。

を妨げる種々の原因が発生してゐるとは云ふものゝ、なほ比較的均等化の傾向が強度であるから、貿易と云ふ文字で外國貿易を理解する常識は、大體に於て當つてゐると云つて差支へなからう。かくて解することは關稅・爲替相場の如き問題と貿易理論を結び附ける際特に便宜である。私はそれ故理論的な貿易の概念と政治地理學的なそれとを區別するが、必らずしも政治地理學的なそれを排斥するものでないと云ふことを注意しておく。

二、貿易は何故に行はれるかの理論

貿易が何故に行はれるかの理論は比較生産費説として知られてゐる。この比較生産費説と云ふ言葉は直ちにリカードと結び附けて論じられてゐるが、リカードはその外國貿易論を取扱ふ章の如何なる個所に於てもかゝる文字を使用してはゐないのである。「一國に於て諸貨物の相對的價值を支配する同じ規則は、二國若くは其以上の國の間に交換せらるゝ貨物の相對的價值を支配するものではない。」となしてゐる如く、比較せらるゝものは相對的價值であつて生産費ではない。ところで相對的價值或ひは交換價值は變動常なきものであつて、その基礎に不動の基準たる何らかの絕對的大いさを豫想することは、如何なる立場に於てリカードを批判するに當つても必らず指摘さるべきである。従つて吾々もリカードの數例を各財貨價值の絕對的大いさを表すものとして次の如く理解する。

- 9) Ohlin, Interregional and international trade 1933 に地域貿易の説明が詳しい。
1) Ricardo, ibid 岩波版 118頁。

葡萄酒一單位を生産するに要する労働時間

ラシヤ一單位を生産するに要する労働時間²⁾

ポルトガル	80	80
英國	120	100

労働時間と云ふ表現は一見労働價值説的外觀を呈するが、吾々は必らずしもそれに固執する必要を認めない。徒らなる價值論争を避けるために、この大いさは財貨間の交換比率を決定する何らかの絶対的大いさを意味するものとしておこう。單に前提的役割を果せば足りるのである。さしてリカードは國際間に於ける相對價值の比較はそのまゝでは可能でないとの見地から³⁾、葡萄酒のポルトガル國內價值80と英國の國內價值120、また羅紗のポルトガル國內價值90と英國の國內價值100との間の比較を遂に斷念するに至つたかの如き論調を示してゐる。(しかしこの點は必らずしも明瞭でない)ミルに至るとこの傾向は更らに著しくなり、國際間の價值比較は明白に否定され、物々交換の前提に立つて、唯兩國内に於ける二財貨の交換比率のみが取扱はれてゐるのである。ミルの祖述者バスターブルに於ても同様であり、この行き方は或る意味に於て英國學派の特徴となつてゐる。現在ハロッドの如く比較生産費説の成立のためには生産費の絶対的大いさに於ける比較は必要でなく、唯兩國に於ける二財貨の交換比率の間に一定の關係があるを以て足りるとする態度も同じ流れを汲むものであらう⁴⁾。けれども國際間に於ても、國際價格が成立して交換が行はれる限り、財貨價值の間には必らず比較されうる何ものかなくてはならぬであらう⁵⁾。さう云つたもの

2) かくの如くリカードの設例を労働時間と解することが、最も正しいと云ふことは、労働價值説をとるものゝ側からのみならず近代理論からも云はれてゐる。
Gerhard Colm, Das Gesetz der komparativen Kosten (weltwirtschaftliches Archiv 32 Bd. Okt. 1930 Heft 2) S. 376 同じことはハーバラーも述べてゐる。Habermas, a. a. O.

ゝ存在を前提せずしては、國際價格現象の説明は不可能とならざるを得ない。だから吾々は比較生産費説が國際價格論にまで發展すべきであると云ふことを念頭に置き乍ら、國際間に於ける價值比較は可能であると云ふことを注意して置こう。リカードに論を戻す。前述の設例に於ける數字はポルトガルは葡萄酒の生産に於ても羅紗の生産に於ても英國に優つてゐること、更らにポルトガルは葡萄酒の生産に於て比較的多く優つており、英國は羅紗の生産に於て比較的少く劣つてゐることを示す。リカードによると國際間では前述の如き數字が前提さるゝ場合、英國は羅紗輸出ポルトガルは葡萄酒輸出に共に利益あり、「此交換はポルトガルの輸入する貨物がポルトガルに於て英國に於けるよりも少量の勞働を以て生産せられる場合に於てもなほやはり行はれるであらう。」と云ふのである。ところで80の價值を持つたポルトガルの葡萄酒が英國へ輸出されるであらうと云ふことは何人も容易に承認するであらうが、100の價值を持つた英國の羅紗がその國內價值90なるポルトガルへ輸出されるとは直ちには理解し得ないところである。リカードは之を次の如く説明する。もし兩國の間に商品流通が行はれないとすれば、二財貨の交換比率は、

英 國	$1W:1.2T \text{ or } 1:1.20$
ポルトガル	$1W:0.88T \text{ or } 1:0.80$

兩國の間に自由なる商業交通が行はれて、二財の交換比率が一Wに對する一・二Tと〇・八八Tとの間に定まる時は、この交換は兩國にとつて明らかに利益である。何故ならば英國は一定量の

3) Ricardo, ibid 岩波版 118頁。

4) R. F. Harrod, International Economics 1933 p. 15.

5) 近代理論に於ても二國間に於ける Real Cost の絶對的大いさは比較しうる筈である。

Viner, The doctrine of Comparative Cost (weltwirtschaftliches Archiv, 36 Bd. Okt. 1932 Heft 2) p. 410 同様のことはコルムも述べてゐる。Colm a.

羅紗と引かへに從來より以上の葡萄酒量を獲得するであらうし、ポルトガルは一定量の葡萄酒と引換へに從來より以上の羅紗を獲得し得るであらう。今假りに二財の交換比率が一W：一Tに定まつたとする。英國は一單位の羅紗に對して $(1-\frac{100}{120})$ だけの葡萄酒量を増加し、ポルトガルは一單位の葡萄酒に對して $(1-\frac{20}{120})$ だけの羅紗量を増加してゐる。かくてポルトガルは葡萄酒のみを生産し、英國は羅紗のみを生産するに至り、この國際分業は兩國を通じて財貨量を増加するのである。以上がリカード外國貿易論の主要である。彼れは相對的價值から出發し、二國に於ける財貨の交換比率を問題とすることにより貿易の利益を算出し、以て貿易が何故に行はれるかの理法を明らかにしてゐる。

ミルはリカードの原理をより平明な形で祖述したのみならず、根本原理から個々の特殊ケースにまで問題を擴大することによつて後の貿易理論の發展に貢獻したところが多い。例へば運賃費用を考慮に入れた場合、貿易が二財以上について行はれる場合、貿易が二國以上で行はれる場合等々を考察した如きである。けれどもそれ等の特殊ケースの考察は問題の本質を變更するものではないから今は觸れないこととして、此處では對物交換比率の種々なる割合の變化による兩國への貿易利益の歸屬に關しミルが發展せしめた理論を考察しよう。リカードに於ては交換比率決定に際して需要の占むる役割は全々無視されてゐた。言葉を換へて云へば需給均衡下に於ける交換比率の決定機構が明らかにされたのである。ミルは問題を一步進め、交換比率が需要の側から如

a. O.

- 6) Ricardo, *ibid* 岩波版 119頁—121頁。
- 7) この説明の仕方はハーバラーによる G. Haberler, a. a. O. S. 99.
- 8) Mill, *ibid*. p. 588.
- 9) Mill, *ibid*. p. 590.
- 10) Mill, *ibid*. p. 591.

何なる作用を受けるかについて考察を加へてゐる。¹¹⁾ 謂はゆる相互需要の法則である。葡萄酒と羅紗の交換比率を例へば一對一にとつて考へてみる。この交換比率に於てはポルトガルの羅紗需要の一定量が存在する筈である。それ以上の數量は需要されることなく、またそれ以下の數量では需要を満し切れない。一方英國に於てもこの交換比率下では一定量の葡萄酒需要が存在し、それ以上は需要されることなく、それ以下の數量では需要を満し切れない。國際需給は一對一の交換比率に於て均衡を保つてゐる。次に假定を變更して一對一の交換比率に於ては、ポルトガルは從來通りの羅紗量を需要せざるに至つたとする。ポルトガルの需要の減少である。之に反して英國は相變らず從來通りの葡萄酒量を需要する。國際需給は明らかに均衡せざるに至つた。必然の結果として英國は自國に不利なる交換比率に甘んずるであらう。この比率を一葡萄酒に對する一・一羅紗であるとする。かゝる交換比率に於てはポルトガルは再び幾分多くの羅紗量を買ふであらうし、英國は高價となつた葡萄酒の需要量を幾分減少するであらう。かくて再び國際需給は均衡するに至る。需要の作用により交換比率はポルトガルにより利益ある如く決定されてゐる。反對の場合同様である。一對一の價格に於てはポルトガルは従前以上の羅紗量を需要するに至つたとする。ポルトガルの需要の増加である。之に反して英國は相變らず從來通りの葡萄酒量を必要とする。國際需給は明らかに均衡せざるに至つた。必然の結果としてポルトガルは自國に不利なる交換比率に甘んずるであらう。この比率を一葡萄酒に對する $\frac{85}{100}$ 羅紗とする。かゝる交換比率に於

11) Mill, *ibid.* pp. 586-587.

てはポルトガルの羅紗需要量は再び幾分減少するであらうし、英國は安價となつた葡萄酒の需要量を幾分増加するであらう。かくて再び國際需給は均衡するに至る。この均衡下に於ける交換比率は明らかに英國に對してより多く有利である。以上二つの場合を通じて相互需要の作用による交換比率の決定は次の如き結論を生む。對物交換比率は相手國の生産物に對する自國の需要度のより小なる國により利益ある如く決定されると。さてミルは第三版に於て更に新しい領域を開拓してゐる。¹²⁾ 今までの議論では相手國の需要を満たすべき國の供給數量については全々考慮が拂はれてゐないが、これは著しく非現實的である。ポルトガルと英國の間に成立すべき國際分業は、あたかもポルトガルがポ萄萄酒需要量の全部を満し、ポルトガルは葡萄酒のみを英國は羅紗のみを生産するが如く考へられてゐる。けれども現實に於てはポルトガルと英國の大きさが異なるによつてポルトガルは相變らず葡萄酒・羅紗の二財を生産してゐるに拘らず英國は羅紗のみを生産するに至る場合や、之と反對の場合が生ずるのである。さう云つた場合交換比率は如何に決定されるかを問題とする必要がある。三つの場合が生ずる。

(1) 兩國の大きさが等しい場合。即ちこれは兩國の生産條件が數に於て等しいことを示す。この場合はポルトガルは葡萄酒のみを英國は羅紗のみを生産するに至り、完全な國際分業が行はれると考へられる。これまで一般的な事例として考察したところで、交換比率は兩國交換比率の間、例へば一對一に定まるであらう。この貿易は兩國へ各々利益を與へる。

(2) ポルトガルが英國に比して大なる場合。即ちこれはポルトガルの生産條件が英國に對し、數に於て壓倒的である場合を示す。この場合貿易開始後に於ける競争の結果は結局ポルトガル價格を支配的たらしめよう。従つて交換比率はポルトガルのそれ即ち「*price*」に定まりこの交換に於てはポルトガルは何ら利益するところなく、貿易の利益はあげて英國に歸する。而して國際分業の結果はポルトガルが相變らず二財を生産してゐるに反し、英國は羅紗のみを生産するに至ると云ふ状態を示す。

(3) 英國がポルトガルに比して大なる場合。即ちこれは英國の生産條件がポルトガルに對し、數に於て壓倒的である場合を示す。あたかも前の場合と反對で、英國が相變らず二財を生産してゐるに反し、ポルトガルは葡萄酒のみを生産するに至ると云ふ國際分業の結果を示す。對物交換比率は英國のそれである、「*price*」に従ひ、この貿易の利益はあげてポルトガルの得るところとなるのである。かくて兩國の大いさ或ひは略々同様のことを意味するであらうが、兩國の生産の數量的割合を考慮に入れると、貿易に於ける利益の分屬は次の如くなる。即ち交換比率のみについて云へば、大國と小國との取引に於て利益するものは常に小國であると云ふことである。

リカードからミルに至る貿易論の大要は右の内に盡きて居ると思はれる。その觀察に於て吾々は曖昧なる相對的價值から出發したために終に財貨の交換比率のみを問題とするに至り、國際分業もこの國際分業によつて生ずる利益も唯兩國に於ける物量の増加と云ふことによつて説明する

に至つてゐる。古典學派が貿易消費者利益説を稱へたのは、彼等が唯交換比率のみを着目し、物量の増加のみを問題としたが故である。相互需要による貿易利益の分屬も、兩國の大いさを考慮に入れた際の貿易利益の種々相もことごとくに對物交換比率についてのみ論じられてゐるに過ぎない。しかし乍ら考へてみると國際交換が國家の統制意思によつて各自に利益ある如く行はれてゐる場合ならいざ知らず、現實の貿易が資本主義的に最高利潤の獲得を目標として行はれてゐる以上、問題は交換比率の動きによる物量の増加と云ふことによつて決して具體的に説明されたとは云へない。云ふまでもなく貿易に従事するのは個々の商人であつて、彼等は一國の素材的富に於ける利益を考慮して貿易に従事するものではなく、唯財貨の價格を通じて相互の利益を認識し、價格に従つて賣買を行つてゐるに過ぎない¹³⁾。従つて假令ひ古典學派の推獎するが如き貿易の利益が、個々の商人活動の無意識的結果として生ずることが事實であるとしても、問題は更らに進んでかゝる事實が資本家的見地に於ける價格關係に如何に現はれるかの問題として検討されねばならない。これはケアンズによつて頻りに強調された點であるが、今は便宜上引例その他リカードに従ひつゝ考察を進めて行く。

三、國際價格決定の理論

再びリカードの設例に歸る。彼の與へた數字卽ちポルトガルの80、90、英國の120、100はそれ

13) Cairnes, *ibid.* p. 319.

の國內交換比率の基準たるべき大いさを表現するのみならず、またこの大いさは國際的にも比較可能であると云ふことはさきに注意せるところである。然らざれば吾々はこの數字によつて英國の生産條件が絶對的に劣り、ポルトガルのそれが絶對的に優れるものとは云ひ得ないであらう。國內では完全な自由競争が前提さるゝが故に、右の數字は競争の落着いた場合に於ける價值比率であると思ふべきであらぬ。其處では費用法則が完全に妥當する換言すれば費用が價格を支配してゐる。故に吾々の數例は、同時に二國に於ける供給價格の大いさであると思ふことが出来る。次の如く書き改められるであらう。

ポルトガル	葡萄酒供給價格	
	80	30
英國	羅紗供給價格	
	120	100

貿易開始前に於ては勿論兩國に於ける需給は均衡してゐる。この狀態に於て貿易が開始されると、商人的見地に於ては商品は常に價格の低き所より高き所へ向つて動くから、葡萄酒・羅紗ともにポルトガルから英國へ輸出されると思ふべきであらぬ。ところが比較生産費説の結論するところによると二財の生産に於て共に優れるポルトガルからは葡萄酒が輸出され、共に劣れる英國からは羅紗が輸出されねばならぬ筈であつた。貿易の利益は部分的であるか全面的であるかは別として、何らかの程度でかゝる國際分業が成立して初めて獲得し得る筈であつた。この比較生

1) 相對價格の理論のみで行く場合、この點のみに着目して比較生産費説は成立せずとする。例へばエンダエル

産費説の主張は價格關係の世界に於ても成立するであらうか。それを成立せしむるためには、吾々は二財がポルトガルから輸出される状態から出發して、窮極の落着點としてポルトガルからは葡萄酒が英國からは羅紗が輸出される状態を導き出さねばならない。

吾々は商品交通は二生産物のみについて行はれること、また商品交通以外の經濟交通は行はれないことを前提してゐるのであるから、ポルトガルから輸出さるべき二財の對價は必然に金をして支拂はれなければならない。英國からの金の流出は英國に於ける需要可能性の減退と賃銀の下落へと導く。之をグラフィカルに云へば英國に於ける需給曲線は同じ程度に下方へ向つて下落することとなる。勿論この場合、金流出によつて引起された購買力の減少は總べての購買者に對して同様に働いてゐること、賃銀低下にまで導く勞働市場への壓迫はすべての生産者の費用に對して同様に働くことが前提されねばならぬ。之とは反對にポルトガルへの金の流入は需要可能性と賃銀の騰貴を結果す。需給曲線は上方へすり上る。かくて新しく生じた價格水準に於ける二財供給價格を次の如くであるとしよう。葡萄酒の價格は依然としてポルトガルに於て英國に於けるよりも低く、之に反して羅紗價格は英國に於てポルトガルに於けるよりも低い。かゝる状態の起り得ることは吾々の數例を維持する限り當然であらう。羅紗は英國から葡萄酒はポルトガルから輸出される状態にある。然らばかゝる事態の進行は如何なる國際價格を生ずるであらうか。相互に輸出入される財貨は今や共通の市場を持つに至つたのであるから、其處にはやがて一物一價の法則が働いて共通の國際價格を生ぜしめ、この價格に於て國際需給は均衡を保たねばならないので

- 2) 以下の説明は主としてバローネ、コルムを參考とした。Enrico Barone, Grundzüge der theoretischen Nationalökonomie S. 106 以下 Gerhald Colm, a. a. O.
- 3) Colm のグラフィカルな説明により明瞭に表現されてゐる。a. a. O. S. 375.

ある。ミルの國際價值論に従ふと、ポ英兩國の大きさの異なるに従つて三つの場合が生ずる。

(1)兩國の大きさが等しい場合。即ちこれは兩國の生産條件が數に於て等しいことを示す。吾々は一般的の論證としてかゝる事例から出發すべきは當然である。この場合國際價格は兩國々内供給價格の中間に定まる。最初價格のより低いポルトガルの二財が英國へ向つて流れ出ることは云ふまでもない。引續き行はれる輸出はポルトガルの二財市場價格を騰貴せしめ、之と反對に英國の二財市場價格を低下せしめつゝ遂に英國からの羅紗輸出を結果するに至るだらう。新しい價格水準に於ては英國羅紗の價格がポルトガルのそれに比して下廻るに至つたのである。更らにこの場合兩國の大きさを等しいとしてゐる限り、一方に於ける價格の騰貴と他方に於ける價格の下落とはその程度を等しくすると見るべきである。従つて兩國から葡萄酒及び羅紗が相互に輸出れるに至つた時の二財の價格は共に兩國々内價格の中間に定まるのは當然である。羅紗價格は95葡萄酒價格は100であることが出来る。

(2)ポルトガルが英國に比して大なる場合。即ちこれはポルトガルの生産條件が英國に對して數に於て壓倒的である場合を示す。この場合國際市場價格の決定者は主としてポルトガルの國內價格であることはミルの指摘する通りである。前の場合と同様に先づ二財がポルトガルから英國へ向つて流出するであらう。更らに引續き行はれる輸出がポルトガルの二財市場價格を騰貴せしめ、英國の二財市場價格を低下せしめつゝ遂に英國からの羅紗輸出を見るに至ることも前の場合と同様である。然るに二財の國際價格は前の場合の如く二國々内價格の中間には定まらない。ポ

ポルトガルが大國であり、英國が小國であると云ふ前提に立つ以上、他の條件を一定とすれば、ポルトガルに於ける僅かの物價騰貴は英國に於ける大なる物價下落となつて現はれる。これは金を介入せしめて考へれば直ちに理解しうるところである。従つて英國から羅紗の輸出されるに至る時點はその價格が著しく下落してポルトガル國內價格に近づいた點である。之を例へば93とすることが出来る。之に對してポルトガルから輸出さるゝ葡萄酒價格は $93 \times \frac{2}{3} = 62\frac{2}{3}$ である。

(3) 英國がポルトガルに比して大なる場合。卽ちこれは英國の生産條件がポルトガルに對し數に於て壓倒的である場合を示す。この國際價格の決定者は主として英國の國內價格である。最初ポルトガルから二財が輸出されること、この輸出がポルトガルの物價を騰貴せしめ、英國の物價を下落せしむることは前二つの場合と同様である。がポルトガルが小國であり、英國が大國であると云ふこの前提に於ては正に(2)とは反對にポルトガルに於ける大幅の物價騰貴が英國に於ける小量の物價下落となつて現はれる。従つて英國から羅紗の輸出されるに至る時點はその價格が國內價格を僅かに下廻るに至つた時點である。これを例へば97とすることが出来る。之に對してポルトガルから輸出さるゝ葡萄酒の價格は $97 \times \frac{2}{10} = 19\frac{4}{5}$ である。

以上三つの場合を要約しよう。

	葡萄酒價格	羅紗價格
(1)	100	95
(2)	$82\frac{2}{3}$	93

(3)

1163

97

この價格は單に國際間にのみ行はれるのではなく、貿易が開始されて兩國が共通の市場を持つに至るや否や、國內にもまた妥當し初める。さて吾々は此處で新しく成立した國際市場價格を各國内費用と比較して見る必要がある。國際間では完全な自由競争が行はれず、生産條件が均等化されない⁴⁾と云ふ前提に立つ以上、貨幣機構を通じての貨幣費用の均等化は行はれるとしても、實質費用は本質的に變化しない筈である。貿易の結果生ずべき素材的富の増加が生産條件に幾分の變化を與へる限りに於て、實質費用に幾分の變化を生ぜしむるであらうが、この點は無視してかゝる。さうした場合吾々は同じ國際價格が生産條件を異にする二國の異つた費用投下に相應じてゐることを知るのである。⁴⁾更らに詳しく云へば生産條件の優れた國の費用は國際市場に於て、高き金價格で云ひ表はされ、生産條件の劣つた國の費用は國際市場に於て低き金價格で表現されてゐる。ポルトガルは勞銀その他の生産要素價格の高いのに拘らず、その優れた生産力の故に葡萄酒を輸出し得るし、英國はより劣つた生産力を持てるに拘らず勞銀その他の生産要素價格の低いため羅紗を輸出すべき状態にあるを示してゐる。⁵⁾兩國の大いさが異なるにつれ、また兩國の需要度が異なるにつれ、その程度は異なるがこれは三つの場合を通じて共通の事實である。以上吾々は引續き商品流通が自由に行はれるとの想定の下に、また貨幣機構を通じての作用は各因子に同様に働くとの想定の下に問題を考察し、結局比較生産費説の主張は、價格關係の世界に於ても成立ち、從つて相對價格の理論と矛盾するものでないことを明らかにしたのである。吾々の想定が破

4) Colm, a. a. O. S. 380.

5) このことは貨幣實銀の高いことは必ずしも物價の高いことを意味しないと云ふことを示してゐる。

れたとき勿論上述の理論は成立たない。例へば生産力の劣つた國が國民的生産力の向上するまで保護關稅制を實行することによつて商品流通の自由を妨げる場合とか、貨幣數量の變化が必らずしも各因子に同様に働かない場合とかである。現實にはむしろ屢々かゝる事實に直面するのであるが、今はそれに立入り得ない。

四、結 語

ミルの様に貿易が何故に起るかの窮極の原因を素材的富の世界に於て探求する傾向と、ケアンズの様に貿易の直接の動きを貨幣價格の世界で探求する傾向が、貿易理論に相補充し合ふものとして存在することは本論の二項三項で觀察した通りである。この二つの行き方は近代理論にもそのまゝ存在してゐる。前者即ち主として、物々交換の世界で研究を進める行き方は、マーシャル・エツデウオース等¹⁾によつて代表される英國的傾向であり、後者即ち主として貨幣價格の世界にのみ問題を限定する行き方は、エンヂェル・オーリン等²⁾によつて代表される大陸的傾向である。この二者は貿易理論に於て理論的に統一されねばならぬ。何故なら既に指摘せる様に、一方は主として貿易が何故に行はれるかの窮極の原因を説明し、他方はその直接の原因を説明するものであるが故に、二者が理論的に統一されたとき、初めて貿易現象は具體的に説明されたと云ひ得るからである。吾々は二者の統一をバローネ・コルム的な方法によつて行つたのであるが、かゝる問題に對する今一つの方法としてタウシッグの方法が擧げられ得るであらう。彼は勞働費用

6) これは後進資本主義國ドイツの ロマンティカーによつて 盛んに主張された事柄である。

1) Alfred Marshall, Money, Credit and Commerce 1922.

2) F. V. Edgeworth, The theory of international values 1894.

„ „, Papers relating to Political Economy. Vol. II. 1925.

3) Taussig, international trade, 1927. これはまたハーバラーによつて祖述された。

から出發してその世界に於て考察し得る問題を考察した後、勞働費用に二國に於て異なる貨幣勞銀のウエイトを附加することによつて價格關係の世界を導き出したのである。このタウシツグの方法はしかし乍ら、例へばヴァイナーも批判してゐる様に、勞働費用以外の費用部分が無視されてゐる點に於て非難されねばならぬ。或ひは同じことを意味するであらうが、勞銀外費用が勞銀費用と同じ比例を保つと云ふ前提がなければならぬ。かゝる前提を置くときタウシツグの導き出した價格關係の世界は吾々が今バローネ・コルムの方法によつて導き出した世界と同じ世界を意味してゐるのではなからうか。兩者は次の如き點に於て一致してゐるからである。

(一)生産條件は絶對的にA國に於て優れB國に於て劣つてゐること。従つて二財共にA國に於てより少い費用投下を以て生産されてゐることを前提して出發してゐる。

(二)然るにそれから導き出された貨幣價格の世界に於ては、A國の生産要素價格が高い結果一財の供給價格はA國に於て低いに拘らず他財の價格はB國に於て低くなつてゐる。

タウシツグの様に最初より兩國に於ける貨幣勞銀の大いさを既定として出發する理論的操作が正しいか、又はバローネ・コルムの如く世界貨幣たる金を介入せしめることによつてかゝる状態を導き出す理論的操作が正しいかについては、無論多くの問題が存するであらう。けれども今はその問題に立入る餘裕を持たないし、また立入る必要もない。本論に於ける吾々の目的は比較生産費説が貨幣價格の世界に於ても成立つことを明らかにするにあり、その目的は既に一應達せられたからである。